

7. 歯学部

I	歯学部の教育目的と特徴	7-2
II	分析項目ごとの水準の判断	7-4
	分析項目 I 教育の実施体制	7-4
	分析項目 II 教育内容	7-10
	分析項目 III 教育方法	7-14
	分析項目 IV 学業の成果	7-17
	分析項目 V 進路・就職の状況	7-19
III	質の向上度の判断	7-22

I 歯学部の教育目的と特徴

歯学部の教育目的

歯学部は、良き歯科医療人を育成し、歯科医学を研究、発展させることを目的とし、「国民への高度な歯科医療の提供」と共に「先端的な歯科医療の研究開発」を重視した人材育成を行っている。さらに、社会のニーズの多様化と国際化が急速に進む現在、総合的に適切な判断を行える学際的国際的な人材の育成につとめている。

歯学部の教育目標

そのため、以下の目標を掲げ教育を行っている。

- ・総合大学の特性を生かし、幅広い教養及び総合的判断能力を身に付けた豊かな人間性の育成
- ・社会の要請並びに科学の進歩に主体的に、独創的に対応し、高度な医療福祉の担い手となりうる歯科医師の育成
- ・歯科医学を基盤に多彩な場で活躍ができる知識と技能、さらに科学者としての学際性と国際性の育成
- ・先端的な歯科医療の研究開発を担うための問題発見、問題解決の能力を身に付け、自ら生涯を通じて学ぶ精神の育成

歯学部の教育内容

上記目標で掲げた歯科医学を基盤に多彩な場で活躍できる人材を育成するため、教育課程は6年一貫教育となっており、歯科医療に必要な臨床科目、その礎となる基礎科目など一般的な歯学教育を中心に、歯科医師に必要な知識と技術の習得を目指す。専門的能力の育成と人格形成は卒業後に社会に出て活躍するための基盤となるものであり、多様化・複雑化・情報化時代において社会に貢献できる能力を身に付けるため、高度な専門的知識だけでなく、論理的・独創的思考力、そして高い倫理観と教養を身に付ける。

歯学部における教育の特徴

歯科医師を養成することが第一の目的であり、そのため歯科医師国家試験に合格する実力を養成すると共に、優れた歯科医師になるための資質を磨くための充実した少人数・完成教育を基本としている。この理念に沿って以下のような特徴あるカリキュラムが実行されている。

- 1) チュートリアルと呼ばれる少人数制の能動的自己学習教育プログラムを取り入れ、1年次では問題発見・解決能力の習得、3年次では自己学習法の習得と向上、5年次では Evidence-based medicine (EBM)の臨床歯科医学への利用法の理解により、歯科医師としての判断能力を身につけることを目的とした能動的自己学習教育法を取り入れている。初年次導入教育では、教養教育と連動した早期見学実習等の専門教育科目により、6年間の歯学教育の動機付けを積極的に図るよう工夫されている。
- 2) 3年次では、ODAPUS プログラムという短期海外留学制度と、各研究室に配属されている自由研究演習が用意されており、国際性の育成並びに研究志向のマインドの養成に心がけている。
- 3) 歯学コアカリキュラムに基づく教育と歯学共用試験の実施：全ての専門教育科目は、コアカリキュラムの内容が基本となっており、それに基づき歯学共用試験(CBT, OSCE)

が実施されている。しかし、本歯学部の教育はそれに終始するのではなく、各分野の多様な考えを取り入れた内容を含み、それぞれの授業科目に取り入れられている。

- 4) 臨床実習：真に実力のある歯科医師の養成に主眼を置き、臨床実習を重視している。クリニカルクラークシップによる診療参加型臨床実習を実施している。CBT, OSCE を修了した後臨床予備実習を経て、5年次後半より約1年間の臨床実習を行っている。歯学部教務委員会専門部会として臨床実習実施部会を設け、全臨床分野の全教員が参加しての究極のチュートリアル教育と言える。

想定する関係者とその期待

歯学部在校生、受験生及びその家族、卒業生が期待するものは、現代社会が要求する優れた歯科医師の養成である。また、彼らに対する周囲の関係者、即ち卒後初年次の研修を行う卒後研修センター、進学先である大学院、卒業生の雇用者、歯科医師会等地域歯科医療に関わる人々、医療行政、歯科医療を求める地域住民たちは、そのような医療・福祉・研究開発を担うことの出来る卒業生を期待している。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

歯学部は、歯学科からなる1学科6年制であり、入学定員は一般入学者55人、3年次からの学士編入学5人からなる(資料Ⅱ-1-1)。歯学部歯学科の教育は、主として大学院医歯薬学総合研究科と医学部・歯学部附属病院に配置された歯学系の教授・准教授・講師・助教・助手の専任教員(132人)が担当している(資料Ⅱ-1-2)。歯学科の構成は、5学科目からなる(資料Ⅱ-1-3)。

その他必要な科目は、非常勤講師をあてている。これらは、歯学教育に必要な分野で専任教員では行い得ないものについて要請している(資料Ⅱ-1-4)。AMDA等民間団体の医師等も講義・実習を行っている(資料Ⅱ-1-5)。また、臨床実習を充実させるため、広く学外から臨床経験の豊富な歯科医師を臨床教授等として招く、あるいはインターンシップによりその施設へ学外実習に行かせる制度を取り入れている(資料Ⅱ-1-6)。

また歯学系教員は、教養教育科目も担当している(資料Ⅱ-1-7)。

教員組織の活動を活性化するため任期制が導入され、平成18年度より6人の再任審査を実施した。

資料Ⅱ-1-1：歯学部歯学科の収容定員と学生現員

年 度	収 容 定 員	学 生 現 員
平成16年度 (H16. 5. 1 現在)	350 人	351 人
平成17年度 (H17. 5. 1 現在)	350 人	348 人
平成18年度 (H18. 5. 1 現在)	350 人	351 人
平成19年度 (H19. 5. 1 現在)	350 人	359 人

(出典：歯学部教務第三係資料)

資料Ⅱ-1-2：大学設置基準に定められた専任教員数及び現員

【 歯 学 部 】 (平成19年10月1日現在) (単位：人)

設置 基準	現 員					
	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	計
75	18 (1)	19 (1)	19 (19)	76 (24)	3 (0)	135 (45)

() 内は病院籍で内数

(出典：岡山大学概要等)

資料Ⅱ-1-3：歯学部歯学科の教員組織の構成と専任教員(教授)の配置

学科目名	口腔基礎 常態学	口腔基礎 病態学	口腔病態 外科学	口腔機能 再建学	予防・発育 加齢歯科学
教授(人)	4	3	3	4	4 (1)

() 内は病院籍で内数

(出典：岡山大学概要等)

資料Ⅱ－1－4：歯学部歯学科の学内・学外兼務教員（非常勤講師）数

年 度	学 内	学 外
平成17年度	93	74
平成18年度	94	72
平成19年度	93	71

（出典：歯学部教務第三係資料）

資料Ⅱ－1－5：外部連携による授業：AMD A等民間団体の医師等

【平成19年度各分野専門科目】

連携事例	区分	担当分野	連携組織名	備考
再生歯学の基礎的演習	講義	口腔病理病態学	Medical Information Bank Co.Ltd 代表取締役	講義の一部
感染症学	講義	口腔微生物学	英保歯科・矯正歯科医院 院長	講義の一部
生体材料学Ⅱ	講義	生体材料学	京都インプラント研究所 所長	講義の一部
歯科補綴学Ⅰ	講義	顎口腔機能制御学	恵愛歯科医院 院長	講義の一部
口腔粘膜疾患	講義	歯顎口腔病態外科学	埼玉県立がんセンター 外科第一部 副部長	講義の一部
予防歯科学	講義	口腔保健学	戸田歯科医院 医院長	講義の一部
口腔衛生学	講義	口腔保健学	北京天衛診療所 歯科医師	講義の一部
小児の口腔保健指導	講義	行動小児歯科学	岡本小児歯科医院 院長	講義の一部
成長期の歯冠修復学実習	実習	行動小児歯科学	大村歯科医院 院長	実習の一部
障害者歯科学	講義	特殊歯科総合治療部	おがた小児歯科医院 理事長	講義の一部

【平成19年度共通専門科目】

連携事例	区分	担当分野	連携組織名	備考
臨床歯科心理学	講義	教務委員長	岸田歯科医院 院長	講義の一部
障害者歯科医療	講義	教務委員長	旭川荘 理事長	講義の一部
国際歯科医療／国際医貢献	講義	教務委員長	神戸医療生活協同組合 なでしこ歯科 歯科部長	講義の一部
国際医療貢献	講義	教務委員長	AMD A 理事長	講義の一部
早期見学実習	講義	教務委員長	特定医療法人里人会 仁和の里 施設長	講義の一部

（出典：歯学部教務第三係資料）

資料Ⅱ－1－6：外部連携による授業：臨床教授等

平成 19 年度

(単位：人)

臨床教授	臨床准教授	臨床講師
14	6	4

(出典：歯学部教務第三係資料)

資料Ⅱ－1－7：歯学部教員による教養教育科目

平成 19 年度開講科目

科目区分	授業科目	担当教員	学部	学期
主題科目 (健やかに生きる)	学際的研究と臨床	窪木 拓男 他	歯	前
主題科目 (健やかに生きる)	成長・老化の人間学	下野 勉 他	歯	前
主題科目 (健やかに生きる)	口の機能と健康管理	松尾 龍二 他	歯	前
主題科目 (健やかに生きる)	健康と口の病気	高柴 正悟 他	歯	後
主題科目 (健やかに生きる)	歯と骨の科学	山本 敏男 他	歯	後
主題科目 (自然と技術)	遺伝子工学の夜明け	福井 一博 他	歯	後

(出典：歯学部教務第三係資料)

観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点到に係る状況)

歯学教育は、その高い専門性に鑑み、これまで文部科学省主導で教授要項が策定され、それに基づき実施されてきた。この実施にあたっては、歯学部教務委員会が中心となり、カリキュラムの策定など学部全般の教育事項について活動を行っている。このため、歯学部教務委員会の中に各種専門部会を置き、学部全ての教員の連携のもとに教育内容、教育改善に向けて取り組む体制が構築されている(資料Ⅱ－1－8)。このうち、全国規模で行われる歯学共用試験(CBT並びにOSCE、資料Ⅱ－1－9)に対しては、それぞれ担当の委員を置き、実施を円滑に行うと共に、その成績を分析して各教員にフィードバックしている(資料Ⅱ－1－10)。

平成 18 年度に歯学部における同僚による授業評価(ピアレビュー)実施体制について歯学部教務委員会を中心に策定し(資料Ⅱ－1－11)、平成 19 年度より実施している。平成 19 年度は 2 つの専門科目で実施し、策定した実施要領にもとづいて授業担当者とレビューワーとの間で授業改善のための懇談が複数回もたれた。それらの結果は歯学部教務委員会に報告されている(資料Ⅱ－1－12)。

全学規模で行われる授業評価アンケート等以外にも、各教員はそれぞれの授業の中で学生の意見を取り入れ授業改善を行っており、その取り組みは毎年全学の教員個人評価調査票に WEB 入力して報告している(資料Ⅱ－1－13)。

全学 FD ワークショップ「桃太郎フォーラム」において、各教員は種々の主題の分科会において教育内容・方法の改善についての研修を積んでいる。さらに、歯学部においては毎年テーマを定めて、歯学部 FD ワークショップを開催している(資料Ⅱ－1－14)。

平成 16～17 年度において、「歯学部の将来を考えるワーキンググループ」をもうけ、教育・研究等に関わる歯学部の活動についての将来像を議論し、その策定書をウェブサイトに掲載している(資料Ⅱ－1－15)。この取組は、平成 18 年度以降にも引き継がれている。

資料Ⅱ-1-8：歯学部教務委員会組織図

歯学部教務委員会	カリキュラム検討部会（教務委員長）		
	臨床実習実施部会		
	その他の専門部会	チュートリアル部会	
		講義室・実習室利用部会	
		早期見学実習検討部会	
		OSCE 部会	
		公募問題作成部会	
		国家試験対策部会	
		CBT 実施担当	
		ODAPUS 実施担当	
FD 実施担当			

（出典：歯学部教務第三係資料）

資料Ⅱ-1-9：共用試験

<p>（社）共用試験実施評価機構ウェブサイト（抜粋）</p> <p>医学と歯学においては、臨床実習開始前に到達しておくべき態度・技能・知識のレベルが、モデル・コア・カリキュラム：教育内容ガイドラインとして提示されている。共用試験は、このガイドラインに準拠し、臨床実習開始前に、1）コンピューターを用いた客観試験（Computer Based Testing, CBT）によって知識の総合的理解度を評価し、2）客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination, OSCE）によって態度・基本的臨床技能を評価することにより、一定水準以上の学生を臨床実習に参加させるために、医学系全80大学、歯学系28大学が協力して推進している大学間で共通の評価システムである。</p>

（出典：（社）共用試験実施評価機構ウェブサイト）

共用試験実施に関わる歯学部教務委員会資料

平成19年度 共用試験歯学系CBT実施報告（抜粋）														
<p>(2)実施日 平成19年8月22日（水曜日）</p> <p>(3)実施時間</p> <table border="0"> <tr><td>ブロック1</td><td>10:00～11:00</td></tr> <tr><td>ブロック2</td><td>11:10～12:10</td></tr> <tr><td>ブロック3</td><td>13:10～14:10</td></tr> <tr><td>ブロック4</td><td>14:20～15:20</td></tr> <tr><td>ブロック5</td><td>15:40～16:40</td></tr> <tr><td>ブロック6</td><td>16:50～17:50</td></tr> <tr><td>ブロック7</td><td>17:50～18:10（実際には17:45に最後の学生が退室）</td></tr> </table> <p>(4)実施会場 岡山大学鹿田地区図書館3階 医学部情報実習室</p> <p>(5)受験学年 5年次生</p> <p>(6)受験者数 60名</p> <p>(7)欠席者数 0名</p> <p>(8)途中棄権者数 0名</p> <p>(9)マスコミ取材の有無 無し</p>	ブロック1	10:00～11:00	ブロック2	11:10～12:10	ブロック3	13:10～14:10	ブロック4	14:20～15:20	ブロック5	15:40～16:40	ブロック6	16:50～17:50	ブロック7	17:50～18:10（実際には17:45に最後の学生が退室）
ブロック1	10:00～11:00													
ブロック2	11:10～12:10													
ブロック3	13:10～14:10													
ブロック4	14:20～15:20													
ブロック5	15:40～16:40													
ブロック6	16:50～17:50													
ブロック7	17:50～18:10（実際には17:45に最後の学生が退室）													
平成19年度 共用試験歯学系OSCE実施報告（抜粋）														
<p>実施日：平成19年9月15日（土曜日）</p> <p>参加教職員：</p> <p>本学教職員（事務部3名含む）80名</p> <p>外部教員12名</p> <p>SP 9名 総計 101名</p> <p>モニタリング委員 2名（愛知学院大 土屋教授・東京医科歯科大 大山助教）</p> <p>受験学生： 60名（5年次学生全員）</p> <p>課題 1-2. 初診患者の医療面接（慢性期）</p> <p>2-4. エックス線写真のマウントと読影</p> <p>6-4. 概形印象</p> <p>4-4. 保護者へのブラッシング指導</p> <p>5-1. レジン充填</p> <p>5-6. 縫合 の6課題</p>														

（出典：歯学部教務第三係資料）

資料Ⅱ－1－10：CBT, OSCE成績

1) CBT成績

年 度	受 験 者	合 格 者	不 合 格 者
平成18年度	5 年次生 56人	56人	0 人
平成19年度	5 年次生 60人	60人	0 人

2) OSCE成績

年 度	受 験 者	合 格 者	不 合 格 者
平成18年度	5 年次生 56人	56人	0 人
平成19年度	5 年次生 60人	60人	0 人

(出典：歯学部教務第三係資料)

資料Ⅱ－1－11：同僚による授業評価（ピアレビュー）について

同僚による授業評価（ピアレビュー）実施体制について

平成19年 2月 5日

平成18年度第10回歯学部教務委員会

【基本理念】

1. ピアレビューとは、ある授業に対し、同一または近接分野の教員が、实地観察をもとにその方法、効果を学んで自己の行う授業の質を高め、あるいは当該授業の改善点について意見を伝え、互いの授業の質を高めることを目的として行う協力作業のことをいう。
2. 授業の質とは、履修学生が獲得する知識量のみならず判断力、感性の涵養、特殊技能の獲得量及びそれらの、学生が学習に費やすべき労力に対する比、など多様な内容を含む。
3. 実施に当たっては、教員の思想・信条、知的財産権、人間的感情への配慮、並びに学生の個人情報についての保護に配慮する。

【実施体制】

1. 実施担当組織：歯学部教務委員会
2. 対象授業：各年度に教務委員会が2～3科目を選定する。選定基準は授業対象学年、クォーター別、コアカリキュラムを参考にする。
3. レビューワー：レビューワーとして歯学部より2～3名の教員を任ずる。当該科目の分野に造詣の深いものを教務委員会が1名以上指名する。また講義担当者が候補者を推薦することも妨げない。
4. 評価
 - 4-1. 事前説明：担当教員は授業計画説明書を作成し、事前にレビューワーに対し説明を行う。
 - 4-2. 評価項目：評価はコアカリキュラムに準拠した授業が行われているかに重点を置く。そのためレビューワーは、前述の授業計画説明書と当該科目のシラバスをもとに、教材の準備状況、プレゼンテーションの技術等について、前年度の学生授業評価アンケート結果と対応させながら評価する。
 - 4-3. 結果評価：上記の結果について、授業担当教員との面談を行い、結果報告書を作成すると共にそれを授業改善のための参考とする。
5. 報告：上記結果報告書は教務委員会が取りまとめ保管し、必要に応じて全学FD委員会に報告する。

(出典：歯学部教務第三係資料)

資料Ⅱ－1－12：平成19年度同僚による授業評価（ピアレビュー）実施の結果について

様式2

同僚による授業評価(ピアレビュー)実施報告書(案)

平成20年 3月 3日
歯学部教務委員会

	開講時期・曜日 時限	対象学年	授業科目名	授業担当者(氏名・ 所属)	ピアレビュー 実施日	レビューワー(氏 名・所属)	備考
1	第3クォーター・ 火曜日・4限	4年	生体材料学2	吉田靖弘・生体材 料学分野	平成19年10 月30日(火)	北山滋雄・歯科薬 理学分野他2名	
2	第3クォーター・ 金曜日・1限	2年	分子歯化学	久保田聡・口腔生 化・分子歯科学	平成19年10 月12日(金)	北山滋雄・歯科薬 理学分野他2名	
3							
4							

(出典：歯学部教務第三係資料)

資料Ⅱ－1－13：教員個人評価

教員個人評価調査票の評価項目

教員の個人評価実施細則（抜粋）

1 教育の領域の評価項目は次のとおりとする。

- (1) 教育活動の名称及び種別
- (2) 教育達成目標
- (3) 学生により授業評価
- (4) 目標達成状況
- (5) 授業に対する取組と改善方策
- (6) 活動データ
- (7) 教育実践記録

(出典 岡山大学教員の個人評価実施細則)

資料Ⅱ－1－14：FD関連各種講演会実施報告書

行 事 名	日 時	講 師 名
教育者のためのシミュレーションと PBLを併用した医療コミュニケーション 教育セミナー	平成17年12月17日	岐阜大学医学部医学教育センター： 藤崎和彦先生，広島大学病院口腔総 合診療科：小川哲次先生，日本歯科 大学新潟歯学部：影山幾男先生
チュートリアルFD	平成18年3月20日	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 顎口腔機能制御学分野：完山学先生， 行動小児歯科分野：吉田登志子先生
講演会：東京医科歯科大学歯学部にお ける全人的医療に関する教育の概要	平成19年1月25～26日	東京医科歯科大学：俣木志朗先生
講演会：学生のメンタルヘルスについ て	平成19年1月26日	岡山大学保健環境センター：大西勝 先生
講演会：患者が歯科医療に望むこと	平成19年2月21日	NPO法人ささえあい医療人権センタ ーCOML(コムル)：辻本好子理事長
チュートリアルFD	平成19年3月14日	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 顎口腔機能制御学分野：完山学先生， 行動小児歯科分野：吉田登志子先生

(出典：歯学部教務第三係資料)

資料Ⅱ-1-15：歯学部将来WG

岡山大学歯学部戦略的計画（抜粋）

6. 教育カリキュラムのシステムと具体案

近年、従来の教育システムである授業形式は一方通行的な側面があることが指摘されて来た。教育カリキュラムのシステムにおいて、現在、講義の期間と実習の期間がずれているために学生の理解が得られにくいという問題や、実習内容も歯科医師としての内容が望まれ、技工士としての仕事はなくなってきているので、講義・実習時間をもっと自由に使えるカリキュラムとするのはどうか（例えば、一限講義・二限実習）。

また、現問題点として単位とクォーター制の矛盾や正規入学者と学士入学者の学習統一化などの再カリキュラムの見直しが必要であると思われる。

教育カリキュラムの一つとしてチュートリアル教育が様々な大学に広まりつつあり、自ら考え、成長して行く学生を作ることが期待されている。しかし、このチュートリアル教育自体の改善やどの時期にどのようなテーマのチュートリアルを入れるかの検討の必要性もある。中には、臨床の場で行わないと意味がないと言う意見もある。まず大きく2つあげられるのが、チューターの育成（質の向上・研修・外部からのチューターを呼ぶ）と評価方法（学生と教官の相互評価・単位を増やす）である。さらに、チュートリアルを効果的に行うために学生が専門講義をどこまで理解・学習しているか把握していなければならない。教授自身もチュートリアルに参加すべきであるという意見も聞かれる。

（出典：岡山大学歯学部戦略的計画）

（2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準） 期待される水準を上回る。

（判断理由）

専任教員数は大学設置基準を満たしており、歯学教育に必要な教員組織を確保していると判断できる。教育内容の充実に向け新たに臨床教授をおくなど組織体制の改善が、歯学部教務委員会とその専門部会の主導のもとに行われている。これら臨床教授は主に経験を積んだ歯科開業医であり、地域医療との連携のもとに実行されている。その他、AMDA等外部民間団体・官公庁との教育連携がなされ、多様な教育体制が構築されている。また、学内の積極的なFD活動のみならず、共用試験等の外部評価システムを取り入れ、教育方法の改善が図られている。学生はこれにより自らの達成度を全国レベルで評価することができる。以上のことから、学生、社会に期待される水準を上回っていると判断した。

分析項目Ⅱ 教育内容

（1）観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

（観点到に係る状況）

6年一貫教育により初年次より専門教育を導入し、初期の教養教育、導入教育と後半の専門教育科目をバランスよく編成している（資料Ⅱ-2-1）。

歯学は、国民の健康に直接影響を及ぼす分野であり、将来の歯科医師を育てることから、専門教育科目は全て必修となっている。これには、歯学教育の高い専門性に鑑み、文部科学省主導で策定された歯学教育モデルコアカリキュラム（資料Ⅱ-2-2）に基づく科目と、岡山大学歯学部の教育目標にそって独自に策定した専門科目が含まれている。

また、歯学教育モデルコアカリキュラムに基づき、カリキュラムを体系化し、平成17年度には専門教育科目の整理統合を行った（資料Ⅱ-2-1）。各科目の内容は歯学教育モデルコアカリキュラムに準拠することがシラバスに明記されている（資料Ⅱ-2-3）。さらに、歯科教育水準向上のため全国の歯科学学生統一試験として、この歯学教育モデルコアカリキュラムに準拠して、前述（分析項目Ⅰ 教育の実施体制 [観点：教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制]）した全国規模で行われる歯学共用試験（資料Ⅱ-1-10：CBT, OSCE成績, P7-8）が平成18年度より本格実施されている。

それらに加え、岡山大学歯学部の教育目標にそって独自に策定した特色ある専門科目と

して、チュートリアル、自由研究演習、短期海外留学制度(ODAPUS)、生命倫理学等を開講し、国際化、学際化を推進している(資料Ⅱ-2-4)。

時間割はクォーター制を採用し(資料Ⅱ-2-5)、早ければ2ヶ月ごと又は4ヶ月ごとに成績判定がなされるため、早期に成績が分かり学生の自己モニターに役立つと共に、学部・教員にとっても学生の成績の早期把握と指導に役立っている。教員・学生相互のフィードバックが迅速になされる少人数教育とも相まって、学生が自己の達成度を把握できるような体制となっている。

資料Ⅱ-2-1：歯学部学生便覧

平成19年度歯学部学生便覧 歯学部規程(抜粋) (専門教育科目の学期) 第9条 専門教育科目の学期は、学則35条に規定する前期を第1期及び第2期、後期を第3期及び第4期に分割する。なお、それぞれの期間は、次のとおりとする。 第1期 4月1日から5月31日まで 第2期 6月1日から9月30日まで 第3期 10月1日から11月30日まで 第4期 12月1日から翌年3月31日まで

(出典：平成19年度歯学部学生便覧)

別表第2(専門教育科目の単位数及び履修方法等)(抜粋)

区 分			授 業 科 目	単 位 数	必修 選択の別	
専 門 教 育 科 目	専 門 基 礎 科 目	自然科学 から歯学 を知る	生物学から 見た歯学	細胞生物学	2.0	必修
			物理・化学 から見た歯 学	生体材料学1	1.0	必修
				生体材料学2	1.0	必修
	専 門 科 目	歯学の研 究と医療 を知る	医療と研究 の原点	早期見学実習	4.0	必修
			人の構造 と機能	細胞・組織 の構成	細胞・組織学	2.0
		器官系の構 造		生体分子の構造・機能と代謝	2.0	必修
				神経の構造	2.0	必修
				頭頸部の構造	2.0	必修
				内臓の構造	1.0	必修
		運動器の構造演習	0.5	必修		

(出典：平成19年度歯学部学生便覧)

資料Ⅱ-2-2：歯学教育モデルコアカリキュラム

歯学教育モデルコアカリキュラム 本歯学教育モデルコアカリキュラムにおける教育内容の選定に当たっては、近年の生命科学や歯科医療技術の進歩によってもたらされた膨大な内容の全てを、従来の教育手法を用いて履修させることは不可能であるとの認識に立ち、全ての学生が履修すべき必須の教育内容を精選し、必要最小限度の内容を提示する方針で行った。ここで記載された教育内容を、どの程度の時間数(又は単位数)で、また、どのような授業科目の中で履修させるかは、各歯科大学・歯学部がその教育理念にしたがって決定すべきものであるが、およそ従来の6割程度の時間数で履修させることが妥当と考えられる。残りの4割程度の時間には、各歯科大学・歯学部の教育理念や特色に基づいたカリキュラムや選択科目を取り入れることが望ましい。本歯学教育モデルコアカリキュラムは教育内容を提示するものであって、教育方法は各歯科大学・歯学部の決定に任されている。

(出典 「21世紀における医学・歯学教育の改善方策について」(医学・歯学教育の在り方に関する調査研究協力者会議))

資料Ⅱ－２－３：歯学部専門教育科目シラバス

平成19年度歯学部専門教育科目シラバス（抜粋）

授業科目：歯・歯周組織の構造と発生

授業担当責任者：山本敏男

授業の概要：解剖学は人体の正常構造を理解，探求する学問で，最も基礎的学問の1つである。学生諸君は人体がどのような素材からどのように形作られるかを肉眼レベルから顕微鏡レベルまで理解し，その構造と機能の密接な関連を理解することが重要である。

学習目標：一般目標：歯と歯周組織の正常構造と機能並びに発生過程を理解する。

行動目標：歯の組織の成り立ちを説明できる。象牙質の組織構造を説明できる。エナメル質の組織構造を説明できる。

授業計画： 1 12月4日 授業内容 象牙質
2 12月11日 " エナメル質
3 12月18日 " 歯髄

成績評価：筆記試験を100点として評価する。

コアカリキュラムとの関連：F-2-(4) 歯・歯周組織の構造と発生

研究活動との関連：担当教員は硬組織（骨・歯の組織）の形成・吸収機構の細胞生物的研究を行っている。

（出典 平成19年度歯学部専門教育科目シラバス）

資料Ⅱ－２－４：岡山大学歯学部の特徴ある専門教育科目について

平成18年度自由研究演習（研究室配属）・歯学国際交流演習（ODAPUS）報告集（抜粋）

有床義歯の設計と患者の満足度に関する研究

緒言

有床義歯は，歯の喪失による咀嚼，発音及び審美などの機能を回復させることを目的とする補綴物である。特に多数歯を喪失した患者に対して用いられる場合が多い。しかしながらクラウン・ブリッジと異なり，有床義歯は装置自体がかなり大きいことなどの問題から，患者が不快感等を訴えることもあり，十分な満足が得られにくい場合もみられる。有床義歯の形態（設計）は，患者の歯の欠損形態によって異なる。さらに欠損形態が同じであっても，義歯の形態あるいはその材質はさまざまである（図1）。これは，残存歯や咬合などの状態が患者によって違うことも原因であるが，患者の希望や術者（歯科医師）の好みなどに影響される場合も多い。

本研究では患者の口腔内で実際に使用される義歯の床面積と重量を測定し，患者の義歯に対する満足度との関連を検討することにより，満足度の高い有床義歯の条件を考察した。

方法

対象として用いた義歯はレジン床義歯70床（上顎37床，下顎33床），コバルト・クロム合金製金属床義歯17床（上顎5床，下顎12床）であった。測定はそれぞれの義歯の欠損歯数，重量及び義歯床の仮想咬合平面に対する投影面積の三項目について行った。

結果

1. 義歯の投影面積と欠損歯数との関連：上下顎レジン床義歯の投影面積と欠損歯数との間にはいずれも正の相関がみられ，欠損歯数の増加とともに，上下顎義歯床の投影面積が増加する傾向を示した。（図2，3）

（出典：平成18年度ODAPUSプログラム，自由研究演習実施報告集）

資料Ⅱ－２－５：歯学部授業時間割

【 第3クォーター，火曜日 】（抜粋）

	1 限	2 限	3 限	4 限	5 限
1年	早期見学実習（チュートリアル）				細胞生物学
2年	内臓の構造実習			教養実験	
3年	自由研究演習（研究室配属）				
4年	放射線生物学	歯科疾患予防の方法論	口腔感染防御論	生体材料学	
5年	診療参加型臨床実習				
6年	総合歯学演習				

（出典 平成19年度歯学部時間割）

観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

歯学部入学者にとって歯科医師国家試験に合格することは最大の関心事である。これに答えるべく歯学部では基礎・臨床にバランスのとれた専門教育科目が組まれている。また、より密接な対策としては、教務委員会に国家試験対策部会を設けて卒業予定者の受験対策を支援している(資料Ⅱ-2-6, 資料Ⅱ-1-8: 歯学部教務委員会組織図, P7-7)。平成17年度(平成18年2月実施)の第99回歯科医師国家試験では、国公私立大学すべてを含めた中で全国トップの合格率であった(資料Ⅱ-2-7)。

上記理由から歯学部専門科目は全て必修であり、歯学部生が他学部の授業科目を受講することは容易ではない。従って、学生の多様なニーズに応えるためのカリキュラム上の工夫は、歯学部内で図られている。それらの事項は前項(分析項目Ⅱ 教育内容 [観点: 教育課程の編成])で述べたように、歯学教育モデルコアカリキュラムに準拠すると同時に岡山大学歯学部の教育目標に基づく独自の教育プログラムによって達成されるようになっている。

技術面だけでなく高度な判断能力を有し、悩みを持つ患者を一個人として対峙し治療を行う優れた歯科医師の養成のために、全人的歯科医療教育が望まれている。歯学部教務委員会は、資料Ⅱ-1-14(FD関連各種講演会実施報告書, P7-9)に見られるような様々なFD活動により全人的歯科医療教育の実践に取り組んでいる。また、多様なニーズに応える制度上の取り組みの一つとして、平成16年度より私費外国人留学生の受け入れを実施している。彼らの授業、課外活動等での問題に対処するため各学年に留学生アドバイザーをもうけている(資料Ⅱ-2-1: 歯学部学生便覧)。

優秀な歯科医師の養成は社会からの第一の要請である。学部教育だけでなく、平成17年度の卒業生から必修化された卒後臨床研修によりそれに応えている(資料Ⅱ-2-8)。さらに大学院への進学を促し、平成19年度より開設された高度専門職養成のための大学院コースによりレベルの高い歯科医師の養成に努めている(資料Ⅱ-2-9)。また、研究志向の学生を育てるために平成18年度より優秀な学生を学部5年次から大学院に進級させる飛び級制度を実施している。

資料Ⅱ-2-6: 国家試験対策部会活動報告書

国家試験対策部会議事要旨(抜粋)

平成19年8月24日(金)開催

国家試験合格率アップを目指すための方策について

- 1) 部会長より、国家試験の可否は、過去の学業成績並びに歯学のととの成績と相関がある程度あること、成績下位者並びに歯学のととの成績下位者に対する対策が必要であることについて、配布資料を用いて説明がなされた。
- 2) 本年度の歯学のととの問題は、その難易度並びに出題傾向を昨年度と同様とし、昨年の下位3分の1にあたる75点を目標に可否を決定することになった。この点に届かない者に対して、国家試験対策部会は積極的に関与し、生活面も含めた指導を行う。指導の詳細は歯学のととの採点が終わる頃に第2回国家試験対策部会を開催し、再協議することとなった。再試験、再々試験の時期は、例年より遅めに設定する。再試験、再々試験を受験するための課題を受験者に課し、国家試験対策部会が成績下位者と接触を保つように心がけることとなった。

(出典: 歯学部国家試験対策部会議事要旨)

資料Ⅱ-2-7: 歯科医師国家試験合格率

実施年度	歯学部合格率(%)	歯学部合格率の全国順位(位)	全国平均合格率(%)
平成15年度	90.4	5	74.2
平成16年度	86.8	8	74.6
平成17年度	96.9	1	80.8
平成18年度	90.4	4	74.2

(出典: 厚生労働省歯科医師国家試験成績報告)

資料Ⅱ－２－８：研修医マッチングプログラム

歯科医師臨床研修マッチングプログラム

歯科医師臨床研修マッチングプログラム（以下、歯科マッチング）とは、歯科医師免許を得て歯科医師臨床研修を受けようとする者（以下、研修希望者）と、歯学若しくは医学を履修する課程を置く大学に附属する病院（歯科医業を行わないものを除きます。）又は厚生労働大臣の指定する病院若しくは診療所（以下、研修施設）の研修プログラムとを、研修希望者及び研修施設の希望を踏まえて、一定の規則（アルゴリズム）に従って、コンピュータにより組合せを決定するシステムです。

（出典：歯科医師臨床研修マッチング協議会ホームページ）

資料Ⅱ－２－９：大学院進学説明会

大学院進学説明会

日 時 平成19年6月1日（金） 18：00～
場 所 第2示説室
内 容

卒後臨床研修医の説明会と共に開催しており、キャリアパスの一貫として、卒後の病院勤務の説明と同時に大学院の制度を説明した。

資料は大学院募集要項である。大学院の授業料、単位、修了要件、奨学金、図書館の利用法、各専攻分野の研究内容、社会人が入学する場合の注意点等について説明した。

（出典：歯学部教務第三係資料）

（２）分析項目の水準及びその判断理由

（水準） 期待される水準を大きく上回る。

（判断理由）

教育課程は歯学モデルコアカリキュラムに基づき編成されており、歯科医師国家試験に合格しうる知識・技能・態度を身に付けられるようになっている。その成果は、毎年の歯科医師国家試験の高合格率に表れており、特に平成18年2月実施の第99回歯科医師国家試験では国公立大学すべてを含めた中で、全国トップの合格率であった。さらに、技術面だけでなく高度な判断能力を有し、悩みを持つ患者を一個人として対峙し治療を行う優れた歯科医師の養成のために、歯学部教務委員会は、資料Ⅱ－１－14（FD関連各種講演会実施報告書、P7-9）に見られる様々なFD活動により全人的歯科医療教育の実践に取り組んでいる。岡山大学歯学部の教育理念に沿って行われるこの様な取り組みの結果から、学生、社会に期待される水準を大きく上回っていると判断した。

分析項目Ⅲ 教育方法**（１）観点ごとの分析****観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫**

（観点到係る状況）

歯学部教育は、文部科学省主導による歯学教育モデルコアカリキュラム（資料Ⅱ－２－２：歯学教育モデルコアカリキュラム、P7-11）により編成されており、その内容に応じて講義、演習、実験、実習が歯学基礎・臨床分野を通じてバランスよく策定されてきた（資料Ⅱ－２－１：歯学部学生便覧、P7-10～資料Ⅱ－２－５：歯学部授業時間割、P7-12）。ほとんどすべての科目が必修となっているので、履修モデルの作成は特に必要がない。時間割により濃密にカリキュラムが組み立てられており、他学部のように取得資格・免許別に履修スタイルが違うことは一切ないので、学生も履修に迷うことはない。したがって履修指導の力点は、個々の学生の履修状況を把握して適切に指導することであるが、前述（分析項目Ⅱ 教育内容〔観点：教育課程の編成〕）したようにクォーター制、少人数教育の利点を生

かして指導に当たっている。また、アカデミックアドバイザーとして顧問教員制度を設け、入学から卒業まで一貫した指導を行っている（資料Ⅱ－２－１：歯学部学生便覧，P7-10）。

個々の授業は、その内容に応じた教育法を歯学教育モデルコアカリキュラム（資料Ⅱ－２－２）、学生授業評価アンケート（資料Ⅱ－３－１）、歯学部並びに全学FD（資料Ⅱ－１－14：FD関連各種講演会実施報告書，P7-9）、歯学教育における全国レベルのFD（例えば日本歯科医学教育学会が主催するワークショップ等）を参考に各担当教員が工夫し、実施している。また、平成18年度に同僚による授業評価（ピアレビュー）実施体制を策定し（資料Ⅱ－１－11：同僚による授業評価（ピアレビュー）について，P7-8）、教務委員会主導で平成19年度よりピアレビューを実施している（資料Ⅱ－１－12：平成19年度同僚による授業評価（ピアレビュー）実施の結果について，P7-9）。

歯学部の特徴として実習・演習系の科目が多く個人的な指導を必要とするため、TAを多用し、対話型専門教育の指導において効果的な補助者として活用している（資料Ⅱ－３－２）。

歯学部教育のもう一つの特徴は、診療参加型臨床実習の充実であり、教務委員会専門部会として臨床実習実施部会を置き、指導に当たっている（資料Ⅱ－３－３）。臨床家として疾病や臓器だけをみるのではなく悩みを持つ患者を一個人として対峙し治療を行うこと（全人的歯科医療）、そのためには歯科医師として活躍するための知・情・意のバランスがとれ、いずれにも秀でた能力を養う教育（全人的教育）が必要である。歯学部教務委員会は、平成18年度岡山大学学長裁量経費「メンタルケアに学ぶ全人的歯科医療教育プログラムの開発」並びに平成19年度同学長裁量経費「アドバンスドチュートリアルによる全人的歯科医療教育の実践」により全人的歯科医療教育に取り組んでいる。

資料Ⅱ－３－１：学生授業評価アンケート

平成18年度授業評価アンケート結果分析（抜粋）

3 平均評点3未満の講義数及び回答講義数に対する割合

平均評点3未満の講義数は回答講義数128に対し、わずかに1科目のみで、その講義については、各設問の内、Q6に対して平均評点2.9であった。しかし、この科目のQ1に対する平均評点は4.2であり、その授業科目の全体的評価は決して悪いものではない。また、同一教員の担当する他の複数の授業科目も評点はまちまちであるが全てに低いわけではない。したがって、教授法等についての個別指導の必要性を認めなかった。

歯学部全体としては、昨年よりも平均評点3未満の講義数は減少しており、全学的に見ても良好であると思われる、今後もこれを継続したい。

（出典 平成18年度授業評価アンケート結果分析）

平成18年度授業評価アンケート集計結果（抜粋）

【 専門教育科目の平均値 】

質問項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9
歯学部	4.0	4.0	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	4.0	4.1
大学全体	4.0	4.0	3.8	3.7	3.8	3.8	3.8	3.9	4.1

（出典 平成18年度後期授業評価アンケート集計結果）

資料Ⅱ－３－２：TA実績

年 度	T A 人 数
平成16年度	71 人
平成17年度	78 人
平成18年度	72 人
平成19年度	65 人

（出典：歯学部教務第三係資料）

資料Ⅱ－3－3：臨床実習実施部会活動

歯学部臨床実習実施部会（平成19年8月22日開催）議事要旨（抜粋）

2 報告事項

1) 1 診学生の状況について

- ① 学生が体調不良で手術を受けた方がよいとの診断を受けた。診療，教授診等において各科ご配慮お願いしますと副部会長から依頼があった。
- ② ○○君の卒業に向けて，各科特別スケジュール，メニューで対応中であるが，9月末までに修了できない科もある様子である。各診療科に卒業に向けてサポートをお願いする。

3 審議事項

1) 次年度の班引き継ぎ患者について

- ① 副部会長より資料3について，学生人数が56人から62人に増加した，学士入学者は分けた，などの説明があり，委員からも各学生の班分けに対して意見が出され，出来るだけ学籍番号順に並べる方が良いという意見が出て，そのように修正することになった。
- ② 委員より休学中の学生の名前がないが，問い合わせた方が良いのではないかと意見があり，教務と相談することになった。また，放射線科では7人の班では苦しいとの意見もあった。

（出典 歯学部教務第三係資料）

観点 主体的な学習を促す取組

（観点到る状況）

初年次導入教育は，教養教育と専門教育を統合的に図ることにより，学びの姿勢を身につけさせ，それに続く6年間の一貫教育において継続的に学生の主体的な学習を促している。1～3年次での教養教育科目では，年間40単位の上制限を設けている。専門教育科目はほとんど全てが必修であり，時間割で定められたとおりに受講することとなるが，課題探求型少人数グループ学習チュートリアル1～3（T(A)）のために準備の時間（T(B)）を設け，学生の自主的学習を促している。

学習指導は，各学年に顧問教員を2名設け，教務委員会委員及び学生生活委員会委員，また教務第三係との連携のもと体制整備されている（資料Ⅱ－2－1：歯学部学生便覧，P7-10）。また，平成17年11月に学習状況及び学生生活の相談に応じる部屋を教務第三係前に新たに設け，指導体制をハードの面からも充実させた。学習状況の相談には常時対応することができる。

歯学部ではクォーター制を採用しており，早ければ2ヶ月毎又は4ヶ月毎に成績判定がなされる。したがって，他学部に比べて早期に成績がわかるため，学生の自己モニターに役立ち，また学部としても学生の成績の早期の把握と指導に役立っている。成績は顧問教員にも通知される。学生数が少ないため成績判定の結果は，学生が教務委員会委員や顧問教員を通して自己点検することができる。

また，臨床実習では臨床実習実施部会を設け実習上で問題ある学生の把握に努めており，それぞれの専攻分野の担当教員が学習状況に応じて指導している（資料Ⅱ－3－3）。実習に必要な詳細なマニュアルが作成されており，学生はそれぞれ冊子体で自己学習できるようになっている。また，平成19年度より歯学部教務委員会ホームページに臨床実習に関する項目（日程表等）を掲載して随時参照できるようにした。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

（水準） 期待される水準を上回る。

（判断理由）

歯学モデルコアカリキュラムに準拠した講義・実習が生まれ，さらにODAPUS，自由研究演習（研究室配属），チュートリアル等授業形態の異なる歯学部独自の教育プログラムを準

備して多様な学生の要望に応じている。また、ピアレビュー、教員FDにより学習指導法の研修に努めている。少人数、チュートリアル授業を取り入れることで主体的な学習態度を身につけさせると共に、ハード面でも勉学に快適な環境を整えるよう努力している。以上のことから、学生、社会に期待される水準を上回っていると判断した。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

歯学部専門教育は、歯学モデルコアカリキュラムに基づく積み上げ式の専門教育科目で構成されており、年次ごとの単位修得状況から学生は将来の歯科医師として必要な知識・技能・態度を修得している。

平成14年度より実施されている自由研究演習(研究室配属)では、全体発表会、報告書により充実が図られ(資料Ⅱ-2-4:岡山大学歯学部の特徴ある専門教育について、P7-12)、その研究成果も学部学生期間中での学会発表(別添資料1:歯学部歯学科学生の学会発表、P1)、一流誌の英語論文(別添資料2:歯学部歯学科学生の学術論文発表、P1)に結びついている。また、歯学部生の研究発表国際大会の国内予選会スチューデントクリニシャンプログラムへもこの実習をもとに毎年参加し入賞している(別添資料3:スチューデントクリニシャンプログラム報告書、P1)。

臨床実習に上がる前には、歯学共用試験(CBT, OSCE)を実施し、臨床実習に必要な知識・技能・態度を評価しており、本格実施となった平成18年度以降もその成績は、全国レベルから見て高い水準にある(資料Ⅱ-1-9:共用試験、P7-7、資料Ⅱ-1-10:CBT, OSCE成績、P7-8)。

岡山大学歯学部は、クリニカルクラークシップに基づく診療参加型臨床実習を取り入れており、歯学部教務委員会の専門部会として臨床実習実施部会が臨床実習教育の充実に取り組んでいる(資料Ⅱ-1-8:歯学部教務委員会組織図、P7-7、資料Ⅱ-3-3:臨床実習実施部会活動、P7-16)。臨床教授制度(資料Ⅱ-1-6:外部連携による授業:臨床教授等、P7-6)等を取り入れるなど充実した臨床実習教育がなされており、その成果は歯科医師国家試験の高合格率(資料Ⅱ-2-7:歯科医師国家試験合格率、P7-13)等にも反映されている。

標準修業年限以内で卒業する者は毎年89%以上である。臨床実習終了後、「歯学のまとめ」を実施し、学習の成果や効果が図られ、学力や資質・能力が身に付いていることを検証すると共に、歯科医師国家試験形式の試験により受験準備を行っている。その成果は、毎年高水準を保っている歯科医師国家試験合格率に現れている(資料Ⅱ-2-7:歯科医師国家試験合格率、P7-13)。

観点 学業の成果に対する学生の評価

(観点に係る状況)

歯学部は少人数教育が基本となっており、実習・演習形式の授業科目が多いため、各教員は学生からの意見を直接把握することが可能である。それらの結果で特記すべき事項は、各教員が教員個人評価調査票に入力しており、学生の授業評価アンケート(資料Ⅱ-3-1:学生授業評価アンケート、P7-15)、卒業予定者アンケート(資料Ⅱ-4-1)の結果からも学業の達成度は良好である。

また、平成17年度より鹿田地区学生・教職員の集いを実施し、学生の意見を聴取している(資料Ⅱ-4-2)。学生からの意見で多数を占めたのは、鹿田地区の福利厚生施設の充実であり、それを受けて学生食堂、保健環境センター鹿田室等の入る記念会館の改修が

平成19年度に行われた。

歯学部学生にとって最大の関心事は歯科医師国家試験合格である。臨床実習終了後における国家試験対策のための様々な授業、補習等において、学生からの意見、要望が寄せられ、改善すべき点は毎年教務委員会を中心として取り組んでいるが（資料Ⅱ-2-6：国家試験対策部会活動報告書、P7-13）、概ね学生からの評価は良好であり、学生は歯科医師国家試験合格の水準に到達していると判断できる（分析項目Ⅴ参照）。

資料Ⅱ-4-1：卒業者・卒業予定者アンケート結果

平成18年度卒業予定者アンケート調査結果について（抜粋）

教育目標の達成度について

歯学部で達成度の高かった知識・技能等は、「専門的知識」、「困難対処能力」、「協調性」である。これらはいずれも歯科医師として重要な資質であり、6年間の教育課程で歯科医師国家試験の合格するだけの知識と技能を身につけるだけでなく、将来に渡って歯科医療に携わる者に必要な能力の開発に成功していることを示している。

一方で、「幅広い分野に渡る教養」の獲得については達成度が比較的低い。全学的に見て、「幅広い教養」の達成度が高ければ高いほど「専門的知識等」の達成度は低い結果となっている。歯学部は、最も「専門的知識等」の達成度が高い。この両者は相対的な評価となるため、達成度が低いと答えた「幅広い教養」についても標準的なものであろうと考える。

（出典：平成18年度卒業予定者アンケート調査結果の分析・歯学部教務第三係資料）

資料Ⅱ-4-2：鹿田地区学生・教職員の集いの案内

「鹿田キャンパス学生・教職員の集い」の案内（抜粋）

「鹿田キャンパス学生・教職員の集い」のご案内（兼 趣意書）

平成19年9月3日

鹿田地区教員各位

大学院医歯薬学総合研究科長	田中紀章
医学部長	松井秀樹
歯学部長	滝川正春
保健学科長	浅利正二

「鹿田キャンパス学生・教職員の集い」は、鹿田キャンパスの医学部・歯学部学生と教職員が一同に会し、学生支援のあり方、方策、授業、課外活動、学生生活、教育施設・環境等、大学生活における様々な事柄について意見交換を行い、鹿田キャンパスのより良い教育環境への改善を図るきっかけとすることを目的に開催するものです。

つきましては下記により平成19年度「鹿田キャンパス学生・教職員の集い」を開催しますので、本集いの趣旨にご賛同いただき、一人でも多くの教職員がご参加いただきますようお願いいたします。

記

1. 開催日時・場所・会費

平成19年10月7日（日） 13時～15時

ピュアリティまきび（岡山市下石井2-6-4）

（出典：「鹿田キャンパス学生・教職員の集い」の案内（兼 趣意書）・歯学部教務第三係資料）

（2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準） 期待される水準を上回る。

（判断理由）

学部学生の間における学会発表、一流国際誌への英語論文発表、研究発表全国大会への参加入賞等に見られるように、研究志向の学生を養成する教育が実質化され、その成果が大学院進学率の充足にも繋がっている。また、臨床志向の学生にとっても、診療参加型臨床実習の充実は教育に対する満足度を上げ、さらには歯科医師国家試験の高合格率にも繋がっている。以上のことから、学生、社会に期待される水準を上回っていると判断した。

分析項目V 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 卒業(修了)後の進路の状況

(観点に係る状況)

歯学部は進路選択と同様重要なものが歯科医師国家試験であり、これに合格することが歯学部入学者の最大の関心事である。これへの対策として教務委員会に国家試験対策部会を設けて卒業予定者の受験対策を支援しているが(資料Ⅱ-2-6:国家試験対策部会活動報告書, P7-13),平成18年2月実施の第99回歯科医師国家試験では,国公立大学すべてを含めた中で全国トップ,また翌年の第100回歯科医師国家試験では4位の高合格率であった(資料Ⅱ-2-7:歯科医師国家試験合格率, P7-13)。

平成17年度卒業生から卒後初期臨床研修が必修化され,歯学部を卒業すると1年以上の臨床研修を指定の病院で受けなければならない(資料Ⅱ-2-8:研修医マッチングプログラム, P7-14)。卒業生の3分の2は岡山大学医学部・歯学部附属病院において,3分の1はその他の病院において卒後研修を行っている(資料Ⅱ-5-1)。歯学部では卒後初期臨床研修へスムーズに移れるよう,卒業予定者へ卒後臨床研修の申込方法等の説明会を年数回開催している。

一方,大学院への進学率は例年定員を充足しており,そのうち本学卒業生の割合は半数以上を占めている(資料Ⅱ-5-2)。また他大学大学院に進学するものも例年数名程度いる。卒後臨床研修が修了した後に大学院へ進学を希望している者のため,大学院の説明会も開催している。卒後臨床研修が必修化されたためその導入年は一時的に入学者が減少したが,翌年からは以前と同程度の進学率を回復している。

卒業生の進路としては,最終的に開業する者が圧倒的に多いが,大学教員,研究所勤務,病院勤務,厚生労働省や地方の保健関係の仕事に就く者など多種多様な分野で活躍している(資料Ⅱ-5-3)。全国の医院・病院から届く歯科医師の求人票は教務第三係が収集・管理しており,これを卒業予定者,卒後臨床研修修了予定者及び既卒者に閲覧してもらい,就職サービスの向上に努めている。また,他の歯科系の大学院の募集要項もファイルし,閲覧に供して進路選択の充実を図っている。

資料Ⅱ-5-1:岡山大学歯学部における卒後研修マッチング結果

年 度	岡山大学病院で研修	他の病院で研修	計
平成17年度	42 人	11 人	53 人
平成18年度	27 人	18 人	45 人

(出典:歯学部教務第三係資料)

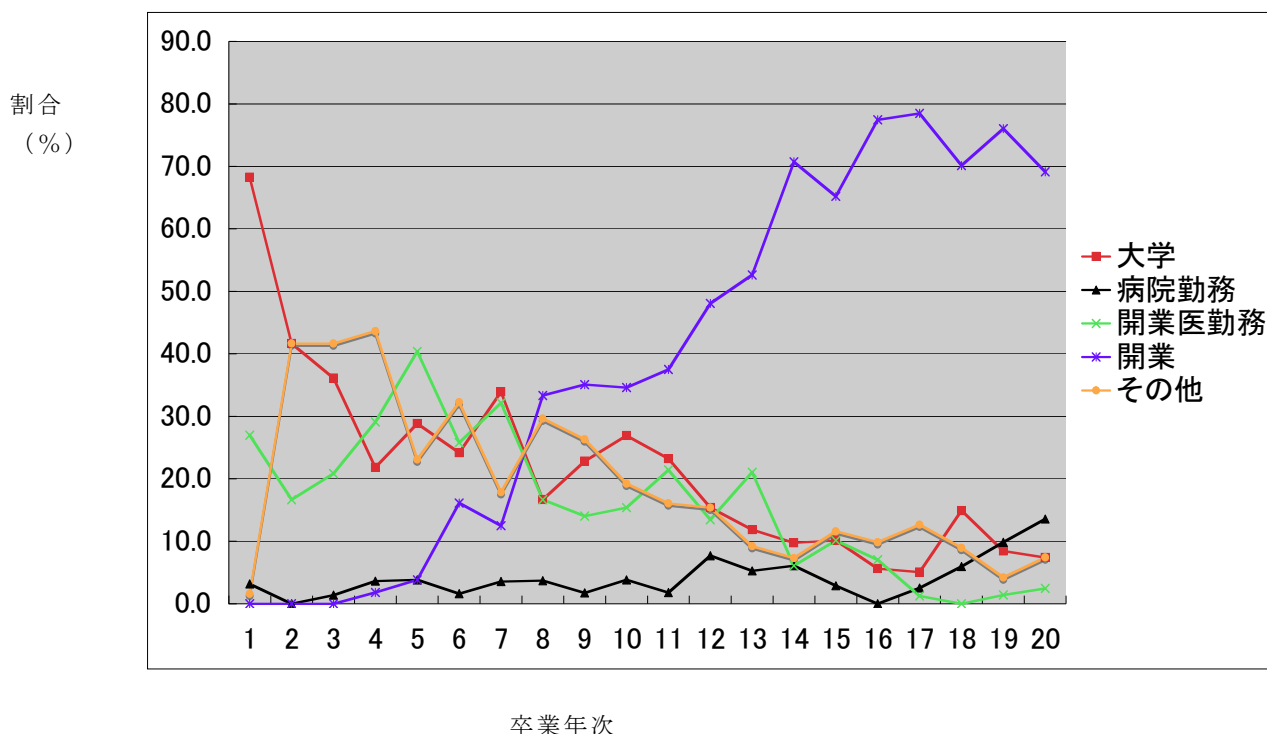
資料Ⅱ-5-2:岡山大学歯学部卒業生の大学院進学状況

卒業年度	卒業生数	岡山大学大学院医 歯薬学総合研究科	他大学医療系 大学院	他分野大学院
平成16年度	63人	入学年度 平成17年度 (46)	1 人	0 人
平成17年度	56	入学年度 平成18年度 (14)	0	0
平成18年度	52	入学年度 平成19年度 (35)	0	1

()内数は平成17~19年度入学(平成16~18年度卒業)の他大学卒業生も含めた歯学系全入学者数。平成17並びに18年度卒業生は卒後研修必修化のため平成18,19年度入学はそれぞれ1並びに2名のみである。平成19年度入学者()内数には平成17年度本学歯学部卒業生が含まれる。

(出典:歯学部教務第三係資料)

資料Ⅱ－5－3：岡山大学歯学部卒業生の進路状況



(出典：岡山大学歯学部同窓会資料)

観点 関係者からの評価

(観点に係る状況)

平成 17 年 2 月 27 日に歯学部並びに岡山歯学会により岡山大学歯学部創設 25 周年記念式典が行われ、岡山大学歯学部同窓会等からの資料をもとに歯学部卒業生進路の紹介が行われた(資料Ⅱ－5－4)。卒業生の進路として、最終的には歯科医院の個人開業が圧倒的に多く、同窓会からの発言が進路に関する関係者の評価の主たるものであると考えられる(資料Ⅱ－5－3)。また、岡山県歯科医師会において本学卒業生が活躍していること、県並びに市歯科医師会推薦の臨床教授の任用がなされていること(資料Ⅱ－1－6：外部連携による授業：臨床教授等，P7-6)からも評価の一端が伺える。その他、本歯学部の特徴として、保健行政に係わるものも多数おり、多方面からの期待に答えている。

資料Ⅱ－5－4：歯学部創設 25 周年記念事業報告書

岡山大学歯学部創設25周年記念報告書(抜粋)

1～17期卒業生の卒業進路状況は、図2に示したとおりです。社会的な状況・要求を鑑みて予測はしていましたが、卒業間もない時期は大学に所属する先生が多数を占め、卒業の年数を経るにつれて開業される先生の割合が増加することが顕著に分かります。また、大学所属と開業の各々のラインが交差する年数は卒業後7～10年目であるので、この年階層あたりが「人生の岐路」になっているのではないのでしょうか。この結果は、事の善悪は別にして、おそらく他大学、とりわけ私立大学の状況と比較して差があり、岡山大学の特徴と言えることかもしれません。いわゆる、開業医勤務者は開業予備軍の意味合いから、卒業後4～6年目でその割合はピークを示しています。病院歯科勤務者は全体に低い割合で推移していますが、その中でもI期生では第2位の進路になっています。(図1の卒業19年目)。この進路は永久就職として魅力ある職場の一つなのかもしれません。

(出典：岡山大学歯学部創設25周年記念誌・歯学部教務第三係資料)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

歯学部は進路選択と同様の重要なものが歯科医師国家試験であり、これに合格することが歯学部入学者の最大の関心事である。これへの対策として教務委員会に国家試験対策部会を設けて卒業予定者の受験対策を支援している。平成 18 年 2 月実施の第 99 回歯科医師国家試験では国公立大学すべてを含めた中で全国トップの合格率であり、ここ数年は常にトップ 10 位以内にある高合格率を誇っている。この様な努力が背景になり、卒業後の進路も多種多様で資料Ⅱ－5－3に見られるように開業だけでなく多方面で活躍している。こうした進路を支えるために、歯学部では教務第三係が卒業予定者への卒後臨床研修の申込方法等の説明会、卒後臨床研修が修了した後に大学院へ進学を希望している者のための大学院の説明会、さらに全国の医院・病院から届く歯科医師の求人票の収集・管理・閲覧サービスを行い、就職サービスの充実・向上に努めている。以上のことから、卒業生並びに社会から期待される水準を上回っていると判断した。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例1「外部評価を取り入れた教育方法改善の取り組み」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取組)

平成13年文部省主導により歯学教育のモデルコアカリキュラムが提示され、それに基づく臨床実習開始前の学生の適切な評価システムとして歯学共用試験(CBT, OSCE)が翌平成14年よりトライアルとして導入された。歯学部はこの第1回より共用試験を実施し、平成18年度からは本格実施に合わせて臨床実習への進級判定の一つとしてその成績評価を活用している。歯学部教務委員会は専門部会をおき、CBT試験問題の作成、OSCE実施体制の策定、OSCE評価者の養成、並びにCBT, OSCE試験結果の分析とそれによる成績判定の基準の明確化を行ってきた。これらはほとんどの歯学部教員の参加でなされるものであり、歯学部FDとしての取り組みとも言える。この過程を通じ、基礎・臨床分野の教員の連携がなされ、臨床実習前学生の成績評価の厳密化が達成されたと判断した。

②事例2「国際化への対応」(分析項目Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組)

平成13年度より開始された歯学部短期海外留学制度(Okayama Dental Stay-Abroad Program for Under Graduate, ODAPUS)は、国際化への動機付け教育プログラムとして歯学部独自のカリキュラムの中で設定された。年々希望者が増え、ここ数年は10人前後が米国等数カ国の大学に留学し、その国の歯学教育に接して研鑽を深め、帰国後には報告会を開催して学部内でその成果を共有している。同一期間で自由研究演習が開講されており、学生はいずれかを選択必修することとなっている。自由研究演習においてもその研究成果が学会発表、論文発表に結びつき、国際学会での発表や一流国際誌への英語論文の発表が続いている。

③事例3「全人的歯科医療教育プログラムの開発とその実践」(分析項目Ⅲ)

(質の向上があったと判断する取組)

歯科医療の高度化、超高齢化社会における疾病の複雑化等歯科医学教育に科せられた問題は多く、全人的歯科医療教育が望まれている。疾病や臓器だけをみるのではなく悩みを持つ患者を一個人として対峙し治療を行うこと(全人的歯科医療)、そのためには歯科医師として活躍するための知・情・意のバランスのとれいづれにも秀でた能力を養う教育(全人的教育)が必要である。歯学部教務委員会は、平成18年度岡山大学学長裁量経費「メンタルケアに学ぶ全人的歯科医療教育プログラムの開発」において、近年注目されているメンタルヘルズに焦点を当て上記教育プログラムの開発に取り組み、その成果を報告した。平成19年度は同学長裁量経費「アドバンスドチュートリアルによる全人的歯科医療教育の実践」が進行中である。

④事例4「期待される優秀な歯科医師養成のための臨床実習教育の充実」(分析項目Ⅳ)

(質の向上があったと判断する取組)

岡山大学歯学部は、クリニカルクラークシップに基づく診療参加型臨床実習を取り入れている。医学部・歯学部附属病院統合後は、歯学部教務委員会の専門部会としての臨床実習実施部会の位置づけを明確にし、臨床実習教育の充実に取り組んでいる。豊富な経験と技能を有する開業医・勤務医を臨床教授として招き、附属病院での講義・演習だけでなく、学外施設での見学実習を通じて附属病院では体験できない多様な歯科医療の現場を経験させている。

③事例5「歯科医師国家試験合格率向上のための取り組み」(分析項目V)

(質の向上があったと判断する取組)

歯学部学生にとって最大の関心事は歯科医師国家試験に合格し、歯科医師となることである。これまで歯学部では歯科医師国家試験合格率の向上をめざし、「歯学のまとめ」等卒業試験や全国模試実施等を通じてその取り組みを行ってきた。平成18年度からは歯学部教務委員会に専門部会、国家試験対策部会を設置し、全分野からの協力の下その対策を強化した。こうした努力により歯科医師国家試験は高合格率を維持しており、特に平成18年2月実施の第99回歯科医師国家試験では、国公立大学すべてを含めた中で全国トップの合格率であった。